***【日本財団事業】***

**自然体験活動の「義務教育プログラム化」に関する視察報告書**

* 視察者：高砂樹史　1名
* 視察日程：2011年10月６日～11日
* 視察先：
	+ 沖縄県南城市久高島　久高留学センター
	+ 沖縄県名護市開催　ＣＯＮE(自然体験全国協議会)全国フォーラム
* 視察目的
1. 山村留学の成功事例から、自然体験活動の活かし方や学校、地域との協働の可能性探る
2. 全国の自然体験活動の事例から学校教育プログラム化への可能性を探る
* 視察内容および視察結果報告

**【**[**久高島留学センター**](http://www5d.biglobe.ne.jp/~kudaka/)**6日から7日】**

・留学センターの概要

🡺[ホームページ参照](http://www5d.biglobe.ne.jp/~kudaka/)

http://www5d.biglobe.ne.jp/~kudaka/

・長野県泰阜村のグリーンウッド、海士町教育委員会の島前高校教育改革などの取り組みと合わせて、全国でも数少ない、10年以上続く山村留学の成功事例

・実際に、留学センターができる前は、1学年1名程度の小中学生（２０名にも満たない小中学生数）だったが、留学センターの存在とそこでの児童生徒の増加が「地域の子育て力への自信の回復」「島の学校教育への信頼回復」につながり、生徒数が2倍以上、４０名くらいに増えている。実質増は２０名以上。

・つまり、留学センターの子どもは中学生を中心に毎年更新で１０名前後だが、１０名前後くらいは、「一学年に複数以上の子どもがいるので島に帰ってくる」という地域の子どもたちが増えているということ。

・年間の問い合わせは100件超える。意図的に定員は10名程度としてそれ以上は断っている状況（特に、3.11震災以降は、直接の被災児というより「山村留学に対する考え方の変化」「ふるさと回帰」によって急増）。子どもとの面接で、子ども自身が希望して「頑張る」と言えば、定員までは基本的に受け入れることにしている。しかし、学校や地域にも受け入れてもらえるように事前相談もしている。実際に受け入れが始まってからも、学校や地域との連携を欠かさない。受益者負担は、100万円＋アルファ。

・留学センターの施設は公設（宝くじ）。家賃なしの民営。

・日常生活では、スッタフが食事は作るが、片付けや掃除、洗濯などは自活。平日10時就寝、朝6時起床で朝日を拝みに行くところから一日がスタート。テレビなし。土日は9時起床。子ども同士の話し合いを大切にしながらセンターを運営している。

・週数回、地域の子どもたちも入れて、センターのスタッフ主催で学習塾も開催。その代り、地域の人たちに三線、空手、沖縄の踊りなど習いに行く。

・一番大事なことは、子どもが少ないから「子乞いをする」（媚びる・・・とにかくお願いしてきてもらう）のではなく、自分たちの地域や仕組み、教育方針に自信を持って「都会の子どもたちに必要」と胸を張れるかどうか？来てもらう対象の都会の親子にも「一緒に新しい社会システム、教育システムをつくろう」と「わが地域への山村留学」を、自信を持って呼びかけることができるかどうかがカギになる（これは、全国の先進事例に共通しているように思うし、私たちがこれまでやってきた短期の環境教育プログラム＝子どもキャンプなどとも共通する）

・やはり教育方針を巡る親とのトラブルも多いらしく（問題を抱えている子どもが多いので）、こちら側のしっかりとした前向きな教育方針がぶれないことが大切。

・こちら側の教育方針に従うことを契約上も文書化し、それに従うことができなければ帰ってもらうくらいの明確さが必要。

・小値賀でホームステイ中心の長期受け入れを始めるならば、民家さんの負担軽減してあげれるかが大切、例えば週末はどこか別のところで預かるなど・・・というアドバイスも受けた。

・「山村留学における自然体験など体験活動はむしろオマケ、日常生活やその中での躾や話し合いなどにこそ真骨頂がある」という言葉が印象的だった

**【ＣＯＮＥ（全国自然体験推進協議会）全国フォーラムＩｎ琉球】**

・1日目の全体報告。

1. 全国自然学校調査報告。別紙参照。自然学校の定義と役割が幅広くなり、爆発的な勢いで増え、全国で地域づくりの拠点となりつつある自然学校。
2. 自然体験指導者教育に関する連携がすすむ。全国の国立青少年の家などとの指導者システムを共有

⇒CONE指導者養成資格団体となればその需要は長崎県内でも広がっていく

1. 自然体験活動推進法の制定に向けた動きが活発に。制定されれば、全国の小学校で自然体験活動が義務化。
2. リスクマネージャーの育成。全国のすべての団体がリスクマネージメントの担当者を置こう。1泊2日、12時間の講習で取得可能。

・1日目の福島からの報告

1. 福島から500名を超える子どもとその家族が北海道へ。ネットワークの力で。最初は、外へ出ることに「恐怖」を感じていた子どもたちもどんどん元気に
2. 福島の子どもを受け入れた地域が元気になっていった。しばらく途絶えていた地域のお祭りが再開されたり、ホームステイで受けいた民家が新しい地域づくりの参加者になったり・・・

・2日目の自然体験活動と地域づくりについての分科会

1. 小値賀の事例を紹介
2. 渡嘉敷島の山村留学が紹介される。久高島で学んだＩターン者が中心に地域を巻き込みながら毎年6から8名くらいの山村留学生を受け入れ。米や野菜の栽培など自給的な生活を中心にした教育
3. 沖縄北部での修学旅行の受け入れが地域を元気にしている事例

・3日目。各分科会の報告。6年前の視察時と比べても、特に沖縄の体験活動の広がりには目を見張る進歩がある

1. 修学旅行受入れが民泊を中心に広がる。1万人（/年間）以上規模の受け入れ地域が5か所に増え（南城市、読谷村、東村、本部町、伊江島）、さらに広がっている
2. 日帰りの体験も5万人を超す受け入れ団体が3か所も（ニライカナイは7万人/年間）
3. 他方、観光客も増えている中で、一般人向けの体験などもどんどん進んでいる（東村やんばる自然塾など）
4. 各地域のまちづくりに参加するIターンもどんどん増えている印象をうけた
5. 山村留学や森の幼稚園、学童保育などなど、行政や学校と連携した地元の子どもたちへの詩自然体験活動の取り組みも広がっている
* 備考